

---

# つまらない・くだらない公園

おりんぴあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つまらない・くだらない公園

### 【Zコード】

Z5995D

### 【作者名】

おりんぴあ

### 【あらすじ】

ある事故で足が不自由になった主人公・美幸は隣の病室の不思議な少女と出会う。

「つまらない。くだらない」

病室の窓から、外の風景を見下げている少女が呟いた。

「どうやら、『つまらない・くだらない』はその少女の口癖らしい。

あんな事故さえ無かつたら……

少女は九日前の事故のことを思い出した。

突然の出来事だった。いつもと同じ道で同じ友人と……何の変哲の無いオレンジ色の夕暮れの中、家へ帰宅していた。友人と交差点で別れたときだった。すごいスピードで飛ばしまくるバイクと接触した。

「お母さん。私、もう一人でできるから……誠も待ってるし、今日は家に帰つていいよ」

ベッドで座つている少女は病室の時計がもう五時半になつてしまつた事に気付き、母に告げた。

「誠は叔父さんがいるから大丈夫よ。そつそつ美幸、林檎食べる？」

母親は鞄から林檎の入つたタッパーを出して言った。

「……もう！ お母さん！ 私の事なんかもういいから！ まだ誠は5歳なんだからね！」

美幸と呼ばれた少女が怒鳴った。

病室が静かになる。

母親は困つたような顔したまま「じゃあね」と言つて出て行つた。ドアを閉まる音が部屋中に響いた。

すると急に、美幸の心にチクチクと悲しさと虚しさが、めり込んできた。

『めんね。お母さん……私、弱くて。きつく当たつて』めんね。

本当は誠、しつかり者だから大丈夫だよね。私、悲しかったんだ。  
もつテニスが出来ないって……もう歩けないかもしねないって……。  
美幸の頬に涙が一粒伝わって、唇まで流れた。そして自分の足を  
なでた。

つまらない。ぐだらないよ……こんなのが

朝、田が覚めると見知らぬ少女が美幸の病室にいた。  
「……どちらさまですか？」

寝起きの美幸は恐るおそる訊ねた。  
少女の顔は整っていて、唇はサクランボの様に赤い。そして瞳は  
とても綺麗に光っていた。少女はしばらくボーッと一点を見つめて  
いた。そして

「おはよう！ 美幸ちゃん。えっと……私はね、百合ひづんだ  
よ。この病室の隣にいるの。」

と突然、百合と名乗った少女が微笑して言つた。  
知らない少女に自己紹介をされて美幸は戸惑つた。しかし、ここ  
で沈黙をつくると気まずくなりそうと思い、美幸はあいさつをした。

「ねえ、美幸ちゃん！ お外行こうよー！」

いきなり百合は提案をした。

「ノンキな子。なんだかムカつく……

「ねえ、いいでしょ？ 行こうよー！ 美幸ちゃん～！」

百合はおねだりをした。

……まあ、退屈だし。一回だけなら行つてあげるか……

美幸は「いいよ」と言つて、看護婦さんに車椅子を出してもらつ  
た。

「どこに行くつもり？」

美幸は訊ねた。

「この病院のすぐ横の公園！」

百合はうれしそうに言い、「じゃあ準備してくるから、1階のロビーで待つて」と言い残してどこかへ行ってしまった。

あの『つまらなくて、くだらない公園』か。……そう言えば、百合ちゃんはあんな元気なのにどうして病院で入院してるんだる……

公園には中年の看護婦さんも一緒にについて来た。

「今日は日差しがポカポカだね。きっといい天気なのかなあ？」と百合は伸びをして言った。看護婦さんはニコニコ笑つてベンチに腰をおろした。

「あ、花だ」

美幸はぽつりと呟いた。

「え？ お花？ すつ「」おーいー わつとタンポポさんだよねー」

百合は言った。

わつきから……なんなんだろ？ 変な感じ……

美幸は百合の言動に違和感を感じた。

「ねえ、美幸ちゃん。このお花、本当は何のお花なの？」

百合が訊ねた。美幸はびっくりした。そして

「わつきから……どうしたの？ おかしこよ」

と呟つてしまつた。もうちょっと言葉を選べばよかつた……と美幸は後悔したが遅かつた。百合は悲しそうに呟いた。

「おかしくないよ……だつて私……」

百合は途中まで呟つてしまはらく沈黙が続いた。そして言った。

「……田、見えないんだもん」

え？

美幸は驚いた。

見えて……いないの？ …… いの子は…… いの綺麗に

光った瞳には何も映っていないの……信じられない……

反応に困った美幸に気付いた看護婦さんは

「もう帰りましょうか

と話を切り上げようとした。しかし

「待つて。ねえ美幸ちゃん！ もつと教えて！ どんな形でどんな色をしている花なのか知りたいの！」

百合は必死になつた。

「私は目が見えない。だけど普通の人よりね、耳がいいの。遠くの鳥の鳴き声とか、風の音とか聞こえるんだよー。」

そう言つと、百合は二コつと微笑んだ。

百合の笑顔はとても生き生きしていた。

つられて美幸も百合に微笑んだ。

「あ、今。美幸ちゃん笑つた？」

百合はクスクスと笑いながら言つた。

美幸は、いつのまにか『つまらい・くだらない公園』がとても新鮮な場所に思えていた。

(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございました。  
よかつたら感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5995d/>

---

つまらない・くだらない公園

2010年11月25日17時53分発行